

## 末の松山と興井（沖ノ井）

通りを一本隔てて並ぶこの二ヶ所は、どちらも俳聖・松尾芭蕉（1644-1694）をはじめとする日本の最も偉大な歌人の作品に登場します。

末の松山は、数本の松の木がそびえ立つ丘です。その中には樹齢 400 年を超えるものもあり、木々の根元には墓碑が並んでいます。芭蕉はこの美しい景観と人の営みの無常を思わせる墓碑の対比に涙を浮かべたとされています。この時の心情は、芭蕉の紀行集『奥の細道』に綴られ、不朽のものとなりました。

近くにある興井は、池の中に大きな岩と小さな松の木々がそびえ立ち、まるで松島湾に浮かぶ小島のように見えます。興井は人の手で作られた観光地の初期の一例であるとされています。この場所は長年にわたってかつて仙台藩（現在の宮城県を含む地域）を治めていた伊達家に保護され、四代藩主伊達綱村（1659-1719）は、歌人たちに愛されたこの場所を保護・管理する役目に地域の名主を任命したほどでした。